

平成13年7月17日

今田屋内科

参 考 資 料

甘遂・芫花・大戟

(株) ウチダ和漢薬

《峻下逐水薬》

峻下逐水薬は性質が峻猛で、激しい下痢をひきおこして大量の水分を排出し、利水作用を兼ねるものもあり、水腫を消退させる効果をもつ。

毒性をもつものが多いので、炮製・配合・用量・使用方法・禁忌などに注意し、安全をはかる必要がある。

これから挙げる‘甘遂・芫花・大戟’は、苦寒下泄・通利二便に働き瀉水逐痰の峻薬である。薬力は甘遂がもっとも強く、大戟がこれに次ぎ、芫花はやや緩和である。毒性についていえば、芫花が最烈で、甘遂・大戟はやや緩やかである。また、伝統的な経験によると、上に挙げた3生薬は甘草と配合禁忌であるとしているが、最近の実験では一致した結果は得られていない。

甘遂（かんすい・かんずい・かんつい）

<基 源>

中国の陝西、河南、山西、甘肅省などに分布するトウダイグサ科の多年草、カンスイ *Euphorbia kansui* の根を乾燥したもの。

* 茎葉に傷をつけると白色の乳液がでる。この汁には毒性があり、かぶれることがあるので注意が必要である。

<産 地>

陝西省に主産し、その他甘肅、河南、山西、湖北など諸省に産する。(和漢薬百科図鑑)

<選 品>

特徴：乾燥した根は連珠状紡錘形、長楕円形を呈し、また細長く不規則な棒状を呈するものもあり、やや湾曲またはねじれている。表面は白色または浅黄白色で、通常淡黄色のひげ根や取り残した赤褐色のコルク層が少し残っている。質は軽く、折れやすく、断面は粉性、皮部は白色で半径の約1/2を占め、木部は浅黄色。かすかに香りがあり、味は少し甘く持続性の刺激をもつ。

選品：肥大して豊満、表面は白色または黄白色できめが細かく、断面の粉性が多く、繊維のないものがよい。
(中薬大辞典)

<臨床応用>

漢方では通便・逐水の効能があり、大・小便不通、浮腫、胸水、腹水などに用いる。激しい瀉下作用と利尿作用があるため峻下逐水薬のひとつに分類され、臨床的には滲出性肋膜炎による胸水・肝硬変による腹水、腎炎による浮腫などに応用する。

・肋膜炎による胸水（結胸症）には大黄・玄明粉などと配合する。（大陷胸湯）

き

<成 分>

カンスイの根には有毒成分のカンスイニンA、Bやトリテルペノイドの α 、 β -ユーホルボール、チカロールなどが含まれている。

<薬理作用>

(1) 瀉下：有効成分は腸粘膜に対し強烈な刺激性があり、炎症性の充血と蠕動を増加させることによってはげしい下痢をおこす。悪心・嘔吐・腹痛・頭がふらつく・動悸・血圧下降などの副作用が生じることがあるので、慎重に用いるべきである。

(2) 利尿作用 (漢薬の臨床応用)

<性 味>

中薬大事典：苦甘、寒、有毒。

神農本草経：味は苦、寒。

名 医 別 録：甘、大寒、有毒。

<帰 経>

中薬大事典：脾、肺、腎の経に入る。

本 草 新 編：胃、脾、膀胱、大・小腸の5経に入る。

<薬効と主治>

中薬大事典：水飲を瀉ぎだす、積聚を破る、二便を通す、の効能がある。水腫脹満、溜飲、結胸、癰腫、噎膈、癥瘕積聚(腹部病塊、結集)、二便不通を治す。

神農本草経：大腹疝瘕、腹満、面目浮腫(顔のむくみ)、留飲宿食を主治し、瘕堅積聚を破る、水穀の道を利す。

名 医 別 録：五水を下す、膀胱留熱、皮中の痞、熱気による腫満を散らす。

薬 性 論：12種の水疾を瀉ぎだす。心腹堅満を治す。水を下す、痰水を除く。皮膚の浮腫を治す。

本 草 綱 目：腎の経および隧道(排泄器官)の水湿、脚気、陰囊水腫、痰迷癰腫、噎膈痞塞を瀉ぎだす。

<用 量>

多くは丸剤・散剤で用いる。粉末は1回0.3~0.6g、多くて1~1.5gを、悪心・嘔吐をおこさないようカプセルに装入してのむ。外用(皮膚化膿症など)には適量(生用)。

*水煎(常用量1.5~3g)してもよいが、一般に効果は悪く、9~12gでも瀉下作用があると

は限らない。(有効成分は水に溶けにくいので、煎剤には入れないとの記載もあり。)

※ (漢薬の臨床応用)

<備 考>

* 焼いて熟用(製甘遂・炒甘遂・焼甘遂)、あるいは酢酸処理したものを用いるのがよい。

(焼くと嘔吐などの副作用が減り、酢酸を作用させると毒性の刺激作用が減少する。)

* 生甘遂は毒性と瀉下作用が強いので用いない方がよい。

* 峻烈・有毒であるから、内服は過量にならないようにし、効果があればすぐに服薬を中止する。

* 虚弱者・妊婦には禁忌。

<処方例>

・大陷胸湯(傷寒論)：大黄・芒硝(元明粉)・甘遂(粉末にしてカプセルに入れる)

[まず、大黄を煎じ、元明粉をいれて1~2回沸騰させ、その湯液で甘遂末を服用する。]

芫花 (げんか)

「去水」、「毒魚」などの別名がある。根は「黄大戟」と称される。李時珍は「芫は^{げん}菘^かに作る。その意味は明らかではない。去水はその効能からいわれたもので、毒魚はその性質をいつたものだ。大戟はその形状が似ているのでいわれたものだ。一般の人はその匂いが悪いので頭痛花と称んでいる。」とっている。

* 『神農本草経』の下品に収載され、古くから逐水薬として知られていた。ただし毒性が強いため、数年間貯蔵したものや、酢酸で加工した^{きくげんか}醋芫花がよいといわれている。

<基 源>

中国、台湾原産のジンチョウゲ科の落葉低木、フジモドキ *Daphne genkwa* の花蕾。

* サツマフジとも呼ばれ、日本には江戸時代初期に渡来し、庭や公園などの植栽され、九州では野生化している。

<産 地>

安徽、江蘇、浙江、四川、山東、福建、湖北など。

(中薬大事典)

<選 品>

特徴：乾燥した蕾は湾曲した、あるいはやや圧扁の紡錘状。通常は1個であるか、あるいは3~7個が束になっている。上端はややふくらんで大きく4裂し、淡黄褐色。

下端は比較的細く、灰褐色、白色の絨毛で密におおわれる。花芯は比較的硬く、赤紫色。花全体の質は軟らかい。微香があるが長く嗅いでいると頭痛を引き起こす。

味はわずかに甘い。これをかむと辛くて刺激的な感じがある。
選品：花蕾が多くて形が整い、淡紫色のものを良品とする。 (中薬大事典)

<臨床応用>

漢方では瀉下と利尿作用を兼有する逐水の効能があり、浮腫や腹水、胸水、喘息などに用いる。効能は甘遂・大戟とほぼ同じであるが、逐水作用は甘遂より弱い。とくに上半身の胸水や喘息、咳嗽に適している。

- ・肋膜炎などによる胸水や肝不全の腹水などに甘遂・大戟などと配合する。(十棗湯)
- ・浮腫や腹水などがあり、大小便が出ないときには牽牛子・甘遂・大戟などと配合する。

(舟車丸)

<成分>

ゲンカニンやアピゲニン、刺激性の油状物質などが含まれ、利尿作用があり、また毒性がある。(漢方のくすりの事典)

<薬理作用>

- (1) 瀉下：ゲンカニンは腸粘膜を刺激してはげしい下痢と腹痛をおこす。
- (2) 利尿：実験によると、芫花の煎剤には利尿作用があるが、多量ではかえって抗利尿作用があり、応用上の安全域は狭い。花蕾のほかに根皮にも利尿作用がある。

(漢薬の臨床応用)

<性味>

中薬大事典：辛苦、温、有毒。

神農本草経：味は辛、温。

名医別録：苦、微温、小毒。

薬性論：大毒。

<帰経>

中薬大事典：肺、脾の経に入る。

本草求真：脾、肺、腎に入る。

<薬効と主治>

中薬大事典：水を逐いやる、痰を滌める、の効能がある。痰飲癖積、喘咳、水腫、脇痛、心腹癥結脹満、食中毒、瘡母、癰腫を治す。

神農本草経：咳逆上気、喉鳴喘(喘鳴)、咽腫短気(咽頭の腫れによる息切れ)、鬼瘡、疔瘻、癰腫を治す。

名医別録：胸中痰水、喜唾、水腫、五臓の皮膚にある五水、および腰痛を消す、寒毒、肉毒を下す。

薬性論：心腹脹満を治す、水気を去る、五臓寒痰、膠のように粘る鼻汁唾液を利す。血脈を通し利す、悪瘡や風痺湿などあらゆる毒風に於る四肢の拘攣や歩行困難を治す、また水腫による膨張も瀉ぎだす。

<用量>

1回0.6~1g。散剤とする。外用(頭部白癬症、痘瘡など)には適量。(漢薬の臨床応用)

<備考>

- *一般に醋炒して用い、陳旧なものほどよい。
- *元気が壮実でないものには軽々しく使用してはならない。陰寒の水腫や妊婦には禁忌。
- *瀉下作用が強く有毒であるため、比較的体力のある場合に短期間のみ使用する。
- *中国では日本住血吸虫による腹水や急性肝炎にも応用している。
- *精神病に対しての報告あり。

<処方例>

・十棗湯(傷寒・金匱)：甘遂・芫花・大戟・大棗

[芫花・甘遂・大戟各等分の粉末をカプセルに入れ、第1日目には1.5g、以後毎日0.3gずつ3gまでふやす。大棗8~15gの煎液で早朝空腹時に服用する。服用期間は5~6日以内。胸水に用いる。]

・舟車丸(景岳全書)：牽牛子・甘遂・芫花・大戟・青皮・木香・陳皮・大黃・輕粉・檳榔子

大戟 (だいげき・たいげき)

李時珍は「その根が辛く苦く、人の咽喉を鋭く刺戟するから名付けられたのだ。今俗に下馬仙と呼ぶ。その意味は人を下痢さすことがはなはだ速いからだ」といっている。古くから水気腫脹、水腫腹大を治す方剤中に大戟を配合しているが、その種類は大変まちまちである。

<基源>

現在中国市場では、主にアカネ科の紅芽大戟及びトウダイグサ科の京大戟が出まわっている。古来本草書に記された正條品は「京大戟」とされているが、現在わが国に輸入される大戟は紅芽大戟のみである。

- ・紅芽大戟：アカネ科 *Rubiaceae* のコウガダイゲキ *Knoxia valerianoides* の根を乾燥したもの。
- ・京大戟：トウダイグサ科 *Euphorbiaceae* のタカトウダイ *Euphorbia pekinensis* の根を乾燥したもの。

<産地>

紅芽大戟：主産地は広西、広東、雲南、貴州など

き

京大戟：主産地は江蘇。このほか、四川、江西、広西などに産する。(中薬大事典)

<選品>

～紅芽大戟～

特徴：コウガダイゲキの乾燥根。長円錐形ないし紡錘形、多くは分枝せず、まれに分枝すものもある。表面は灰褐色ないし紅褐色。多くねじ曲がったしわがあり、時には横生する皮目および枝根の残基、または枝根の跡がみられる。先端には地上茎の跡がある。質は堅くてもろく、折れやすく、断面は平坦でなく、紅褐色ないし黄褐色。香りはかすかで、味は辣くてのどを刺す。

選品：根が大きく、よく肥え、紫紅色、しっかりしていてひげ根のないものが良品とされる。

～京大戟～

特徴：タカトウダイの乾燥した根。円柱形または円錐形である。表面は灰褐色ないし深褐色、あらくて側根があり、頂端はほとんどふくれており、円形の地上茎の跡がたくさんあり、下に向かって徐々に細くなり、縦にまっすぐの溝および横生する皮目や細根の跡がある。堅くて折れにくく、切断面は繊維性で、類白色ないし灰褐色である。香りはなく、味は苦くて渋い。

選品：根が均一で、肥えて若く、柔らかくてひげ根のないものが良品とされる。

(中薬大事典)

<臨床応用>

漢方では逐水・消腫・軟堅の効能があり、浮腫や腹水、胸水、皮膚化膿症、瘰癧などに用いる。とくに峻下逐水薬として知られ、瀉下作用と利尿作用を有している。

・腎炎の浮腫、肋膜炎の胸水、肝硬変の腹水などに甘遂・芫花などと配合する。

(控涎丹・舟車丸)

・瘟疫による嘔吐や下痢、咽頭痛などに山慈姑などと配合する。(紫金錠)

<成分>

・紅芽大戟：遊離アントラキノン類 0.56%および結合型アントラキノン類 0.25%を含む。

・京大戟：トリテルペノイド(オイフォルボンなど)、アルカロイド、色素体オイフォルビア A・B・C110～112mg%を含む。(和漢薬百科図鑑・中薬大事典)

*タカトウダイ(京大戟)には有毒成分であるオイフォルビンなどの成分が含まれ、茎中の乳液が肌にふれると皮膚炎や結膜炎が生じ、誤飲すれば咽頭腫脹、嘔吐、下痢、血中に入れば眩暈、痙攣などを引き起こす。(漢方のくすりの事典)

<薬理作用>

- ・瀉水逐飲・消腫散結：芫花と同じではげしい瀉下作用と利尿作用がある。効力は芫花より弱く、毒性もやや弱い。

<性 味>

中薬大事典：苦辛、寒、有毒。

神農本草経：味は苦、寒。

名 医 別 録：甘、大寒、小毒。

薬 性 論：味は苦辛、大毒。

<帰 経>

中薬大事典：肺、脾、腎の経に入る。

神農本草経：腎、肝に入る。

本 草 通 玄：肝、膀胱の入る。

<薬効と主治>

中薬大事典：水飲を瀉ぎだす、二便を利す、の効能がある。水腫、水臌（無熱性の膀胱の麻痺）、痰飲、瘰癧、化膿性腫瘍を治す。

神農本草経：十二水、腹満急痛（内臓腫瘍による急激な痛み）、積聚（消化不良する胃痛、胃痙攣）、中風による皮膚疼痛、嘔吐を主る。

名 医 別 録：主に頸腋の腫脹、頭痛、発汗を主り、大小腸を利す。

薬 性 論：悪血癖塊（悪血による胃癌の一症）、腹内雷鳴（腹内のごろごろする音）を下す、月経を通す、瘀血を治す、胎を墮すことができる。

<用 量>

多くは丸・散剤とし、1回1～1.2g。煎剤には1.5～3g。（漢薬の臨床応用）

<備 考>

*大戟は甘遂と効能がほぼ同じで、薬力がやや劣る。

*水を駆逐し、飲を化す効能があるから、水腫、痰飲の実証のものに適用される。

*作用が激しく、有毒であるため慎重に投与し、民間療法としては用いない方がよい。

*正気が不足し寒邪があることによって生じる浮腫を患った者および妊婦は、服用してはならない。体の弱い者は服用に注意する。（中薬大辞典）

*虚弱者には用いてはならない。古人は経験的に“弱者がこれを服用すると、ときには吐血する”といている。（漢薬の臨床応用）

*毒があるので誤用すると元気を傷う。（和漢薬百科図鑑）

*毒は菖蒲を用いるとこれを解く(薬性論)

*脾胃を保護する必要があるので、紅棗と蜜糖を用いて胃腸に対する刺激性を緩和する。

(漢薬の臨床応用)

<処方例>

・控涎丹(三因方)：甘遂・大戟・白芥子

[大戟・甘遂・白芥子各等分の粉をカプセルにいれ、第1日目は1.5g、以後は毎日0.3gずつを全量3gになるまで加え、大棗8～15gを煎じた液で早朝空腹時に服用する。5～6日間用いる。胸水に使用する(十棗湯を用いる場合より軽症のものに適用する。)]

・舟車丸(景岳全書)：牽牛子・甘遂・芫花・大戟・青皮・木香・陳皮・大黃・輕粉・檳榔子

・紫金錠(片玉心書)：山慈子・五倍子・続随子霜・大戟・麝香・朱砂・雄黄

～参考文献～

・『和漢薬百科図鑑』 難波恒雄、保育社(1993)

・『中薬大辞典』 上海科学技術社、小学館(1985)

・『漢方のくすりの事典』 鈴木洋著、医歯薬出版(1994)

・『中医臨床のための中薬学』 神戸中医学研究会、医歯薬出版(1993)

・『漢薬の臨床応用』 神戸中医学研究会、医歯薬出版(1981)

○妻夫木茂・戸原震一・松浦達雄・原敬二郎
(福岡・恵光会原病院)

【緒言】非ステロイド系消炎鎮痛薬(NSAID)でコントロールできない痛みはよくみられ、特に癌性の疼痛はそうである。今回われわれは甲状腺腫瘍による慢性の痛みと打撲による急性の痛みに対して、失笑散を使用したので報告する。

【症例】症例1:54歳、女性。主訴は後頸部から肩にかけての痛み。平成9年5月頃、右頸部の腫脹に気づき、同年9月よりは大学病院に通院し、甲状腺の悪性腫瘍と診断されていたが、リンパ節転移もあり根治不可能といわれた。「せめて痛みだけでも」と11月19日入院となった。前頸部から肩にかけて、著明な暗紫色の腫脹があったが、舌の静脈の怒張は認められなかった。失笑散内服にて、約30分で鎮痛効果があらわれ、その効果はそれまでのNSAIDよりも長く持続した。以後、痛みに対するコントロールはできている。腫瘍に対する退縮効果は現在のところみられていない。

症例2:76歳、女性。主訴は右膝の疼痛。平成9年12月11日、横断歩道にて右折車と衝突した。骨折はなかったが、安静・加療目的にて翌日入院となった。右膝には打撲による腫脹がみられた。失笑散内服にて速やかな痛みの軽減がみられた。なお、失笑散は蒲黄・五霊脂をそれぞれ9gを水煎し、300mlを分服させた。

【考案】失笑散は日本漢方ではほとんど用いられていないが、中医では類用されている処方である。その内容は動物性生薬を含み、瘀血の関係した痛みにも有効とされる。今回、失笑散が効いた機序として、症例1では局所の有色性腫脹を瘀血と考え、症例2は打撲を急性の瘀血と考えることによって痛みの軽減が説明できよう。

【総括】瘀血が関係した痛みは日常臨床でよく遭遇し、失笑散は今後さらに使われるべき処方と思われる。

福岡 恵光会 原病院

○權藤禎彦, 西嶋義彦, 上田豊成(薬)
清水正彦, 戸原震一, 原敬二郎(医)

【緒言】十棗湯は「傷寒論」に記載され、胸痛、心下部痛、心下痞硬を示す水毒の畜滞に有効であると考えられる。しかし構成生薬の作用が激しく、余り使用されてはいない。今回我々は十棗湯を外用の軟膏剤(以下、十棗湯軟膏)として使用し、有効性が認められたので報告する。十棗湯軟膏は、大棗を煎じ、煮つめて、芫花、甘遂、大戟の粉末を加え、単軟膏と混合し作製した。【症例】T.S 72才女性。右肺癌、及び右乳房部腫瘍がみられる。右肩激痛にて当院へ入院す。ペントジン注にて痛みを緩和。その後一週間程小康状態が続くが、再び痛みが生じ、ペントジン注及び十棗湯軟膏を使用、キシロカインゼリーとも併用を行う。夜間の痛みも軽減し睡眠できるようになり、キシロカインゼリーの使用量も少なくなり、不要となった。約二週間後疼痛再発あるも、失笑散^{*)}の屯用で痛みのコントロールは良好となり、一ヶ月後退院す。【考察】経口にては毒性が強い生薬方剤の十棗湯は、外用にて鎮痛作用が見られ、外用製剤としての有効性が示唆される。

*)失笑散の癌性疼痛に対する治験例は当院医師による発表例(1998年第49回東洋医学会総会)を参照されたい。